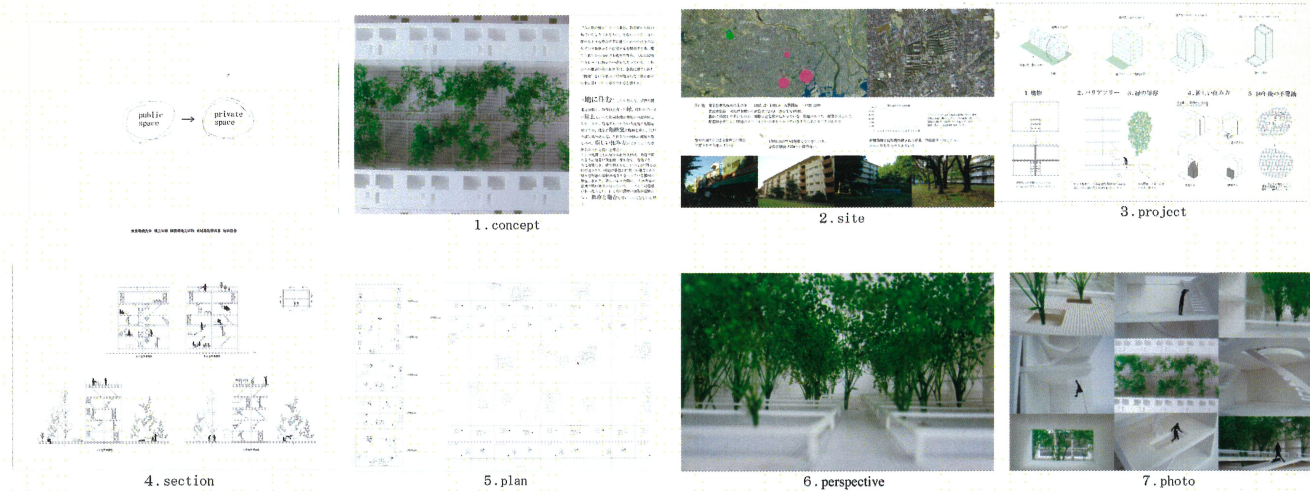


団地再生卒業設計賞 奨励賞

「public space→private space」

島田 佳香

東京電機大学



「"団地"という都市とは切り離された土地を都市のなかに戻していくこと」が、作者にとっての「団地再生」であるという、アイロニカルとも受け取れるがある意味本質を突いた提案である。提案はいくつかの手続きで示される。5階建ての階段室型プラン2住戸分を、階段室を残したまま十字に耐震壁で分割し、縦5層+オープンスペースを敷地に見立てる。分割後の空間は土地付きだから増改築も転用も場合によっては取り壊しもユーザー次第。かくして年月を経た後には「100年前の団地の壁の断片が残っている」「そこに団地があったらしい」ということになって「都市との融合」が達成される。地上から離れた既存団地1階床のレベルに樹木を残しながらウッドデッキを貼るなど魅力的な空間の提案もある。提示されたプランが、あまりに図式的であり、個々のユーザーの個性や変化していく時間の痕跡のようなものが全く示されていないのが残念であった。（小嶋 一浩）

概評

内田 祥哉

今回は、第六回ということで、応募数も安定しているように見えるが、以外に様子を知らない応募者が多いという印象を受けた。今年も再生ではなくて、新築の応募案もあり、再生についても、以前の応募案のように、再生の過程を丁寧に説明したものが少なかった。また、再生に対する考え方にも、学校差や、地域差が目立たず一様で、自己陶醉の表現に、埋没しているものが多いように見えた。社会の情勢は、ますます新築よりは、再生という時代になっているのだから、未来を担う卒業設計らしい若さのあるアイデアの輝いた応募案を期待したかった。

第六回 団地再生卒業設計賞 授賞作品

主催：NPO団地再生研究会 / 団地再生産業協議会

協賛：旭化成ホームズ 株式会社
YKK AP 株式会社

団地再生卒業設計賞 内田賞

新山 直広 （京都精華大学）

団地再生卒業設計賞

亀田 康全 （明治大学）
田川 遼史 （千葉工業大学大学院）

団地再生卒業設計賞 奨励賞

島田 佳香 （東京電機大学）

応募期間：2008年12月上旬～2009年3月31日（火）

審査委員：審査委員長 内田 祥哉（東京大学 名誉教授）

審査委員 大野 秀敏（東京大学大学院 教授）

木下 庸子（工学院大学 教授）

小嶋 一浩（東京理科大学 教授）

応募登録数：28点

応募作品数：18点

団地再生卒業設計賞 内田賞

「継街」

新山 直広

京都精華大学



日本の代表的なニュータウンの一つである千里ニュータウンの集合住宅地は大阪郊外の丘陵地を造成して開発されている。作者は、このプロセスを逆に辿る。復元した丘陵地形で古い集合住宅を埋めてしまい、次に住宅の外壁を残して内壁を取り払う。すると、元の集合住宅の形をした中庭が残る。復元した地形の地下に、この中庭の周りに穴居住宅のような新たな住宅を計画するというものである。出来上がった風景は、反近代・環境志向の現在の思潮を見事に形態化し、詩的である。ところで、作者は、この風景に対して調和的な未来を見ているのか、冷笑的に構えているかいずれだろうか。（大野 秀敏）

団地再生卒業設計賞

「様相の明滅」

-敷地を建築にすることについて-

亀田 康全

明治大学



原宿団地という都心の小規模な団地を対象として、敷地全体を〈雲〉のような新しい構造体で覆う計画である。「400mmの大きなFRP素材の十四面体」の集積によって創られる〈雲〉は、その厚さや天候の変化によって移ろう表情（＝様相の明滅）を示す優れたデザインである。既存の原宿団地を構成する建築や配置をよく観察し十分リスペクトしつつも、提示される計画は「団地再生」というフレームからつい導き出されがちな「しみじみ」したものとは一線を画する、現代的なものである。〈雲〉の構成単位を小さく設定することで既存の建築との関係をフレキシブルにとらえることに成功している。〈雲〉そのものの構造体が既存建築物の耐震補強も担うなど、ヴィジュアルな美しさだけではなく必然性をも獲得しようという態度もこの賞にふさわしいものだろう。惜しまれるのは、提出物のプレゼンテーションからは、この案の持つ魅力が完全には伝わりきっていなかったように思われることである。（小嶋 一浩）

団地再生卒業設計賞 奨励賞

「多摩ニュータウン諏訪団地の再開発」

-既存形態を活用する団地更新手法の研究-

田川 遼史

千葉工業大学大学院



リアリティーのある団地再生計画である。歩行者に配慮した既存団地の配置計画の考えかたを分析したうえで、樹木を保存しつつ既存住棟のストックを活用して更新するという提案は、スクラップ・アンド・ビルドに代わる建替え計画の仕組みとしてひとつの可能性を持つと思われる。また本提案はアイディアの域に留まらずに耐震補強に対する考え方や、住戸数、床面積をともに50%増すなどといった具体的な提示がされており、かなり綿密に練り上げられた計画である。ただ、南側空地に既存の住棟と同等の水平投影面積を持つ増築が成された場合には、当然隣棟間隔も縮まることになる。これが住戸内の住環境に及ぼす影響に対する考えかたについては提案からは読み取れずに残念に思うが、ここまでの配慮を期待してしまうのも、これが実現性の高い計画案に見えるからなのかもしれない。住戸平面の提案においても、配置計画同様に現状を分析して今後のニーズに合った新しい提案に至る過程が取られたなら、更なる評価を得たに違いない。（木下 庸子）